

はじめに

本書は、二〇一四年三月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士論文「在日コリアンに対するレイシズムの研究…現代的レイシズム理論に着目して」に加筆修正を加え学術書としたものである。現在、日本には二〇〇万人を超える外国籍住民がいる。これらの人々が平和に生活を営めるか否かは、制度的な差別を解消できるかどうかということのみならず、圧倒的多数を占める日本人住民が寛容な態度を醸成できるかどうかということにも、多くを依っている。

しかしながら、近年、インターネット・コミュニティを中心に、在日外国人、とくに在日コリアンに対する差別的な言説が盛んに流布されており、インターネット上で糾合し街頭での排外デモを組織する団体の活動も大きな社会問題となっている。

本書は、このような在日コリアンに対する差別的な言説の内容と、その背景にあるレイシズムの構造と性質を定量的に明らかにしようとするものである。

本書に掲載した研究の最も古いものは二〇〇八年秋に実施したものであるが、その頃、表立っては韓流ブームにより（在日コリアンも含めた）コリアンとの友好的なムードが形成されていた一方で、インターネット上では在日コリアンに対する差別的な言説がすでに大きなうねりをなしていた。のちに



2013年3月31日——新大久保にて、排外主義団体のデモ

京都朝鮮学校襲撃事件を起こし、構成員が刑事裁判で有罪判決を、民事裁判では多額の賠償命令を受けた悪名高い「在日特権を許さない市民の会」が発足したのは、その前年のことであった。

コリアンに対する差別・偏見は決して新しい問題ではない。戦後まもなく行われた調査においても、コリアンに向けられる日本人の視線はネガティブなものであったし、一九五〇年代の終わりにおいてもその状況は変化しなかった。そしてまた、この視線が解消された時代もおそらく存在しなかったであろう。一九八〇年に生まれた私が在日コリアンを巡る問題に対する関心を抱いたのは、「高史明」という名前がコリアンであることを推測させるものであったために子どもの頃に繰り返し投げかけられた差別的な言葉がきっかけであった。コリアンに対する差別・偏見は、多くの日本人にとっては目に入らない、とつくの昔に解決された問題であったとしても、コリアンとして日本で生きる人々（それに、コリアンであるという疑いをかけられる者）にとっては、現にそこにある問題だったのだ。

しかしながら、二〇〇〇年代のある時期までは、在日コリアンについて露骨に侮辱的な言及を行うことは、行儀が悪いものであるという社会規範が存在していたように思われる。少なくとも、理性的な、基本的な教育を終えた大人がそのようなことをするものではないという暗黙の、ときに明示的な、了解があったと記憶している（その規範がしばしば、面倒なことに巻き込まれたいから、在日コリアンに言及すること自体を極端に避けるという形で守られるもので、好ましい集団間関係を意味するものではなかったとしても）。

そうした社会規範は、二〇〇〇年代に大きく揺らぎ、今では完全に崩壊したと言っていいたいだろう。二〇一五年の現在、政治家や学者、芸能人などの著名人が、在日コリアンや、あるいはコリアン一般について、衆人環視の中で差別的な発言をすることは珍しいことではなくなっているし、そのような振る舞いが社会的な罰の対象になることもほとんどない。私事ではあるが、友人や他の大学教員の口から差別的な言葉を聞くこともしばしばである。

本書は、目下進行中のこの状況を理解するための社会心理学的な研究の嚆矢である。したがって本書は、過去に存在し今では解消された問題についての本でも、最近になって突如出現した真新しい問題についての本でもなく、古くて新しい問題についての本である。もし仮に在日コリアンに対するレイシズムが完全に真新しい問題であったとするならば、今日のそれのように激しく噴出することはなかっただろう。集団への敵意が噴出するためには、それが育つ土壌がすでに存在している必要があった。例えば何者かが「バツハ好き」に対する偏見と差別を広めようという組織的で大規模な活動を行なったとしても、その試みがうまくいくことはまずないだろう。これは、在日コリアンとは異なり、「バツハ好き」

はそもそもにおいて蔑視されてもおらず敵意を向けられてもいないため、完全に新しく敵意を植えつけ育てるのが非常に困難であることによる。

しかしながら、現在進行していることは過去の単なる反復でもない。インターネット、とくに掲示板やTwitterのように個人が情報を発信できるソーシャル・メディアの隆盛を無視するわけにはいかない。本書に収めた研究は経時的な変化についての分析を許すものではないが、出版に先立つ数年間を切り取ったものとして、有益な情報を与えてくれるであらう。

本書に収めた研究に共通する枠組みは、アメリカでの黒人に対するレイシズムの研究から生まれた、*「新しい種類のレイシズム」* の概念である。このレイシズムは、黒人に対する差別はすでに解消されているにもかかわらず、彼らは自分たちの努力不足の責任を差別に転嫁して抗議し、不当な特権を得ている」とする考えに基づくものである。まさに現在日本でまことしやかに流される *「在日特権」* 言説の兄であるかのようなこのレイシズムについての研究は、こうした言説がレイシズムの単なる付随物ではなくそれ自身がレイシズムの構成要素であり、分析の中心に据える価値があるということを教えてくれた。また、個々のマイノリティは特殊の存在であって他のマイノリティと交換可能な存在ではないとしても、彼らに向けられる視線には多くの共通性があることも教えてくれた。

その一方で、分析を進める中で、*「在日コリアンは日本人より劣っている」という考えに基づく古い種類のレイシズム* の影響力が今なお軽視できないものであることも、明らかにした。本書に収めた研究は、この新旧二つのレイシズムの分析を中心に展開される。

本書に収めた研究には、大別すると二種類のものがある。一つは、Twitter 上での投稿を収集し、分

析したものである。これらの研究は、現にインターネット上で交わされている言説の実態を明らかにするものである。インターネット上に差別的な言説が蔓延していることは繰り返し指摘されているが、それは数字で裏付けすることができるものであろうか？ どのような内容の情報が投稿されているのか、データを用いて明らかにすることはできるだろうか？

もう一つは、質問紙調査によるものである。これらの研究は、Twitterの分析からは明らかにはできない点について、詳細な分析を行なうものである。二つのレイシズムを分離することは妥当かといった基本的な疑問に答えるだけでなく、イデオロギーとレイシズムはどう関係しているだろうか？ とか、インターネットの使用とレイシズムが関連しているというのは本当だろうか？ といった疑問に答えるものである。

なお、本書の基礎的な部分は二〇一三年末から二〇一四年に執筆した博士論文によるものであるが、公刊にあたり、新しい統計やデータを記載すべき部分については極力最新のものを引用している。また、第2章第2節(2.2)は博士論文には掲載していなかったものである。

最後に、本書の位置づけは学術書であり、とくに社会心理学者や社会学者、学生の方が参照して今後の研究に役立ててくださることを期待しているものであるが、在日コリアンへのレイシズムという、目下社会的な関心が大きい問題を扱っており、一般の読者が手にすることも多いと思われる。そうした読者の方に向けて、以下の点を補足しておきたい。

実際にデータを取得して分析した第2章から第5章の各節の冒頭には、その研究で何を行うのかの簡潔な概要を加筆した。まずこの部分に目を通した上でそれぞれの本文に進んでいただきたい。また、そ

の際に各節の基本的な構成を知っておくとよいと思われる。各節は実証的研究論文の慣例にならない、通常、問題と目的、方法、結果、考察の四つのセクションからなっている。問題と目的、セクションでは、先行研究やそれまでの自分の研究を踏まえて、その研究で何を明らかにしようとするかが述べられる。方法、セクションには具体的なデータの取得方法（調査への参加者や質問項目など）が、結果、セクションには分析に用いた統計的手法やその結果が記載される。最後に、考察、セクションで、結果の解釈やそれを踏まえた上でその研究の意義、今後の展望などが述べられる。このうち、方法、結果、のセクションは専門家に向けて記載されている情報であり、一般の読者の方にとってはあまり有益ではないため、ひとまず流し気味に読んでいただき、考察を読みながら疑問が生じたときに振り返ってもらうのがよいであろう。とくに、結果、セクションに記載されている図表は、考察を理解する上で大きな助けになると思われる。ただし、結果と考察と名付けられているセクションに関しては、結果と考察を行き来し、考察を加えながら新しい分析を行う形になっているため、一般の方にとっても有益であると思われる。多少難解かもしれないが、先に各節末尾の研究のまとめに目を通したうえで、期待して読み進めていただきたい。